
キジン × ヘンジン × サツジン

a24

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キジン×ヘンジン×サツジン

【Nコード】

N2520L

【作者名】

a24

【あらすじ】

洋館ミステリ。

トラブルメイカー

《自問自答》の事件。

「やあ、お帰り。ずいぶん遅かったじゃないか。いつたいなにをし
でかして、なにに巻き込まれていたんだい? 《命名師》を自称す
る、いや、自名すると言ったほうが正しいかな? とにかくこの僕
が《トラブルメイカー自問自答》と名付けた君が、今度はどんなことを問い、答えた
のかを教えて欲しいものだね。……いつも通り? そんなことは百
も承知だよ。君にとってのいつも、日常と言い換えても良いそれは、
僕にとっての非日常なのだから。さあ、語っておくれ?」

彼が言い終えたことを確認し、ゆっくりと口を開き、語り始めた。

問1 フーダニット・ハウダニット・ワイダニット

ようやく山荘の姿が、木の葉の隙間から見え、僕は安堵した。

道路のわきに原付を駐車し、獣道のような山道を歩くこと三十分。暑い日ざし、歩きづらい道、顔にぶつかる木の枝。

昼の真っ只中に、ひたすら歩く。

途中で何度引き返そうと考えたかわからない。

「まあ、こんな道だもんなあ」

一人、そんな風につぶやいた。

山荘の姿が見えてから、またしばらく歩く。何回か転びそうになりつつ、やっとのことで山荘の前に着いた。

目の前には大きな谷。山荘とこちらは、太いロープで吊るされた橋がひとつ架かっている。

山荘は横長で、屋根はよくある三角のものだ。外装が洋風なせい
か、小さめの洋館のように見える。

僕は吊橋を渡り始めた。

僕の正面には、山荘の玄関がちょうどくる形になる。

玄関の前に立ち、インターホンを探すが、ついていない。

「うーん、どうしたもんか」

腕を組み、どうしたものかと思い、立ち尽くす。

すると、

「横にしている鐘を引くんですよ」

突然後ろから声がかげられる。

振り向くと、そこには中肉中背の中年がいた。

気の弱そうな雰囲気を持っており、メガネを掛けている。

カッターシャツとスーツのズボンを着ているが、ネクタイは外して
いた。

最近流行りのクールビズというやつだろうか。

なんにしても、こんな山奥にいるなんて怪しすぎる。

だからまず、こう言った。

「えーと、あなたは？」

この不審者め、と言外に伝えかねない表情で言ってやった。

……………無言。

「あ、あれ？ ぼ、僕、質問したんですが…………？」

何かしら返答があると思ってた僕は、うるたえてしまう。

そんな僕の様子を見て中年の彼はクスリと笑い、

「……………そんなに不信がられても困りますよ。なんと応えても怪しまれそう。それに、えーと、きみ、でいいかな？ きみも私からしたら充分怪しいですよ？」

そうか、言われてみればその通りである。

こんな山奥に突然大学生が足を踏み入れれば怪しいのは間違いない。

「あ、それと、怪しいって言った理由わかってますよね？」

確認するかのように尋ねられる。

「ハイ。さすがにこんな山奥、管理者の方以外は普通来ないからですよね？」

さすがにそのくらいことはわかる。

自信を持って答えるが、

「いえ、その、それもあるんですが、どちらかと言うとその手にもっているもののせいで怪しさ満点と言いますか……………」

どうやら彼は不服のようだ。

手に持っている物を確認してみる。

「えっと、これのどこが怪しいんですか？」

「ジュラルミンケースを持ち歩いてる奴のどこが怪しくないんですか！？」

「ジュラルミンケースの何が悪い！」

……………またも、無言。

「ごめんなさい。怪しいですね」

「いえ、私のほうこそ興奮してしまって」

いい年したおっさんと、二十歳くらい青年が二人して頭を下げあう。

しかも、山奥の洋館の前で。
シニールさ満点だった。

彼もそんなことを感じたかどうかはわからないが、気を取り直して自己紹介をされる。

「私は四方八方あたまといひます。職業は一応探偵です」
そういつて四方八さんは名刺を差し出した。

四方八さんが言うには、何時間か前から、少しづつ人が集まり始めたらしい。

そして予定どおりであれば、僕が一番最後だそうだ。
今いる全員は、やはり手紙を持っている。

もちろん、かくいう僕のところにもそれは送られてきていた。
内容を簡潔にまとめるところだ。

八月三日。

あなたをパーティーにご招待します。

パーティーの期間は三日間。

他にも何人か方を招待していますが、私は誰一人の顔もわかりません。

ですがそれは、知らない方を招待したい、というものなのです。

急で不躰な願ひですが、切に、お願いいたします。

もちろん、旅費などはすべてこちらで払います。

金持ちの道楽と思ひ、付き合っただければ幸いです。

参加できる方は、お手数ですが同封された手紙を送ってください。

怪しさ満点だが、夏休みを持て余すだろうと思つた僕は、これが暇つぶしになればいいと思ひ、手紙を出し、今ここにいると言つわけだ。

そんなことを考えているうちに、ロビーについた。

扉を開けると中には、

よく似た背格好をした二人の少女。

どこかで見た気のある女の子。

初老の紳士。

三十路前と見られる特徴のない男。

なぜか黒の三角帽子をかぶっている女子高生。

薄汚い姿のおじさん。

どこか冷たさを感じる瘦躯の男。

喪服のような黒スーツの男性がいた。

初老の紳士が立ち上がり、

「おや、新しい方ですか。ようこそいらつしゃいました。私、この三日間の雑務を任せられました、しゅうじゅうくすけ 仕使 十六助と申します。短い間ですが、よろしくお願いいたします」

深く、お辞儀をされる。

「いえ、こちらこそ願います」

あわててそう返す。

「はい。お任せください。……では、ここにいる皆様の紹介をさせていただきます。あちらのよく似たお二方。ともがみ 友紙 ゆき 優希様とともがみ 友紙 ゆうり 優里様でございます。一卵性の双子だそうで」

少し気の強そうな、キャミソールの娘がこちらを向き、

「私が優希。大学で学生をやりつつ、助教授の職につかせてもらっているわ。この子が妹の優里」

気の弱そうな七部袖のTシャツを着た娘が、

「ゆ、優里です。芸術大学に通っています」

「優里はこの歳です。絵の才能が評価され始めているのよ。すこいでしょうっ？」

姉の優希さんが自慢げにそう言い、妹の優里さんが恥ずかしそうに顔を赤らめて萎縮してしまう。

「優希さん、でいいですよ。優里さんが恥ずかしがってますよ」
僕がそういうと、

「あら、ごめんなさいね、優里」

その言葉に対し、大丈夫、と優里は答えていた。

「さて、では次の方に参りましょうか。こちらにいらっしやるのが、ゆめの夢野 あい愛様です。なんでも、テレビにもよくご出演されてるとか」

活発そうなシヨートカット、釣り目の女の子。

見覚えがあったのはテレビに出ていたためだったようだ。

「ゆめの夢野 あい愛よ。よろしく」

なげやりに言われる。容姿が整っているせいも、冷たい印象を受ける。

すると、仕使さんが小声で、

「その……この山荘が少々お気に召しませんようで、不機嫌なので
ごさいます」

そう教えてくれた。

「では、そこで携帯をいじられていますのが、大真賀 ネネ（
おおまが ー）様でございます」

夏物のセーラー服の上に黒いマントのような、ローブのようなものを
はおり、頭には黒の三角帽子が乗っかっている。

正直なところ、暑くないのかと思うし、逆に暑すぎるから頭が壊
れてしまったのではないかと思う。

……だって、セーラー服ですよ？

普通、旅行にセーラー服で来る奴はいない。

では、なぜこの娘は着て来ているのだろうか？

そんなことを考えていると、ネネちゃんは携帯から顔を上げ、

「あ、どうも、現役女子高生兼魔女見習いの大真賀 ネネです。よ
ろしくです」

………は？ 魔女？

「あの、ネネちゃん？ ひとつ聞きたいことができたんだけどいい
かな？」

ネネちゃんはキョトンとした表情で、

「いいですよ、お兄さん。なんですか？」

「その、……魔女見習いつてのは、なに？」
「まずまずキョトンとした表情になって、」

「え、魔女見習いについて、ですか？ 魔女見習いは、魔女見習い
ですよ……？」

「そんなことをいう。」

「魔女つて、魔法を使うあれだよな？」

「はい、何か使ってみせますか？」

「そう言っただけは、ペーパーナイフとメモ帳を取り出した。」

「 あんまし回数できませんので、よく見てくださいです」

「彼女はペーパーナイフでメモ帳からちぎった一枚を半分に切り、
今度はそれをペーパーナイフで突き刺した。」

「すると、半分になったはずのメモが、元の通り、一枚に戻って
いた。」

「……は、い？」

「僕は驚きで声が出なくなる。」

「仕使さんが後ろから、」

「最初は私もマジックかと思ったのですが、どうやら本当に魔
法のようにございます。タネも仕掛けもございませんでした」

「だから、ネネは最初から魔女見習いだって言ってるんです。まあ信
用できないのもわかりますけど」

「少し頬を膨らませ、抗議する。」

「世の中には変わった人がいるものですね」

「ジュラルミンケースを愛用するような変な人もいることだ。」

「魔女くらいいてもおかしくないだろう。」

「お次はその男性。空岸 志人様でございます」

「おそらく三十路前だろう男が、こちらに向き直る。」

「極端に特徴のない男だ。」

「着ている服も、雰囲気も非常に印象が希薄。」

「そこにいるのにもかかわらず、いないかのような錯覚を覚える。」

「空岸 志人だ。つい最近まで殺人鬼として指名手配されていた。」

殺人はもう飽きたし、逃亡生活もこれ以上は御免だ。そういうわけだから安心してくれ。今のところ誰かを殺すような予定はない」

「さ、殺人鬼ですか。それはまた濃いですね。もしかして特徴がないのも……」

「いや、これは素だ」

余計に濃くなった。

「今度はそちらの方。通間とおりま 道征様みちゆきでございます」

小汚い格好のおっさんだ。

頭をボリボリとかきながら、

「オレア通間 道征つてもんだ。住所不定無職。いわゆるホームレスつてやつだな。まあ、仲良くしよーや」

「はい。短い間かも知れませんが、よろしくお願いしますね」

ホームレス。

ここまででてきた他の人に比べればかわいい物だ。

……それでも充分に変人だが。

「さて、残りはお二方になりました。あちらの若干瘦や躯くしな方が薬師やくし医病いびみ様、向こうの黒いスーツを着た方が、疑衣うたがい 凶様きょうようでございます」

「薬師 医病。医者だ。怪我や病気になったらすぐに私のところに来い。有料で手当てをしてやろう」

メガネをくい、とあげる。

知的だが、人間味が薄い。

冷たさすら感じる男だ。

細いメガネと、体。

切れ長の瞳。

どれもこれも嫌味のようなだ。

「紹介されたとおり、疑衣 凶だ。詐欺師をやっている。もちろん名前は偽名だ」

偽名。

詐欺師。

嘘を吐く職業か。

「薬師さんに、疑衣さんですね。よろしくお願いします」
そういった。

すると、仕使さんが仕切りなおすように、言葉をつむいだ。

「さて、これで全員ですね。では、」
そこまで言ったところで、

「あ、あのう。こ、こんなところに何人も、どんな御用ですか……？」

いつの間にかドアの隙間から、女の子が顔を覗かせていた。

長い黒髪がすつと背中に落ちており、端正な顔立ちをしている。

着ているのは和服だ。

そんな少女に、仕使さんが、

「おや、あなた様は？」

「わ、わたしですか……？ わ、わたしは、この館で死んだ、幽霊
です」

……………幽霊。

色物ばかりだと思っていたが、まだ色物がいたのか。

どことなく不信そうな目で、仕使さんは、

「幽霊、でございますか……？」

「は、はい。この通りです」

そう言っただけ彼女は、扉をすり抜けて、部屋に入ってきた。

……………ほ、本物の幽霊っているんですね……………。

しかし、魔女だっているんだ。

幽霊がいても問題ないだろう。

一瞬、仕使さんが目を見張るが、すぐに柔らかな表情になり、

「あなた様は、このパーティーにご招待された方でございますか？」

「パーティー？ ああ、会食のことですか。ええっと、招待されて
いませんけど、ここに、わたしは住んでいるんですけれど……………」

幽霊にも住居というものがあるのか。

そう考えるとホームレスの通間さんは遅しいな。

何か逡巡していた様子の仕使さんが、

「……わかりました。お住まいになられていたのなら、特別に参加しても問題ないでしょう。では、他の方の紹介を……」

「い、いえ、大丈夫です。その……こっそり隠れて聞いていたので「そうですか。それはようございました。では、自己紹介の方をお願いできますでしょうか？」

「はい。わ、わたしは宮小路みやのこうじ 沙織さおりといます。この館の幽霊です。よ、よろしく申し上げます」

少しおどおどしたところが、小動物チックで可愛いなあ。抱きしめたいかも。

「さて、お待たせしました。では自己紹介をどうぞ
仕使さんがそういうと、僕に視線が集まる。」

言われてみれば、自己紹介がまだだった。

軽く呼吸を整え、一息、

「僕の名前は十一月二十九日じゅういちがつにじゅうきゅうにち 晦日みそかです。大学二年生です。よろしく申し上げます」

「では、全員がこれで揃いました。ご主人様より伝言がございます。えー、どうやら予定していた休暇が取れなかったそうでした。出席できないと。ただ、皆様には楽しんでいただけるように、とのことでした」

申し訳なさそうに、仕使さんがいった。

それに対し、

「ご主人の詳しい予定など、ないのでですか？」

僕がそう訊くと、

「申し訳ございません。どうやらお世話役もパーティーに出席なさる方々と同じように指名されるようでした……。しかも、お世話に当たるのは私だけのようなのです」

「なるほど。それなら仕方ありませんね。……とりあえず、部屋を決めて、荷物を運んではどうでしょうか？」

「そうですね。そういたしましょう」

「仕使さんが場を仕切り始め、部屋が決まってくる。」

「どうやらこの山荘、改め洋館は、上から見たときに口の字型になっているらしい。」

「玄関がちょうど南を向いており、その前には吊橋。」

「西側も南側と同じように崖になっているが、橋は渡されていない。この洋館には裏口があるそうで、そこから出ると、ちょうど洋館の裏、つまりは洋館の北側に出る。」

「東側から北側にかけて、崖こそないものの、少し進めば遭難必至の樹海が生い茂っている。」

「洋館の内側は中庭になっているが、長年放っておかれたため、人が踏み入れないほど雑草が伸びてしまっているそうだ。」

「洋館は三階建てだが、三階があるのは玄関に面しているところだけ。」

「しかも、三階自体が物置部屋と化しているのです、実質は二階建てと変わらない。」

「洋館を口の字の辺ごとに分けて考えると、南棟のみ三階、他の棟は二階ということだ。」

「今僕らがいるロビーは東棟の一階にあり、キッチンは北棟の一階。西棟の一階は管理室のようなもので、雑多な物、何か小物の予備鍵などは大体ここにおいてあるらしい。」

「南棟一階は玄関と廊下しかない。」

「二階はすべて客間になっていて、各棟に四部屋つつの全部で十六部屋。」

「それぞれに部屋番号が振ってあり、南棟西側が01号室で、そこから反時計回りに番号が振られている。」

「さて、部屋決めの話に戻そう。」

「部屋決めの際は、幽霊の沙織ちゃんが、」

「わ、わたしは幽霊なので、部屋なんてなくても大丈夫です」

「と、ムチャクチャな謙虚さを発揮してみたり、」

「俺か？ 俺はこの部屋が良い。……嘘だな」
と、疑衣さんが場をかき乱したりと、なかなか時間がかったが、結局、このようになった。

南棟01号室：夢埜 愛

02号室：宮小路 沙織

03号室：十一月二十九日 晦日

04号室：四方八 方

東棟05号室：疑衣 凶

06号室：空岸 志人

07号室：

08号室：通間 道征

北棟09号室：大真賀 ネネ

10号室：友紙 優希

11号室：友紙 優里

12号室：

西棟13号室：薬師 医病

14号室：

15号室：

16号室：

仕使さんは西棟一階、管理室の横に使用人用の部屋があるので、そこで充分だそうだ。

部屋割りが決まったため、鍵を取りに管理室に向かう。

鍵を渡されるとき、仕使さんが、

「扉は非常に重厚で、鍵もしっかりとしています。鍵を紛失されると、中に入れないという事態になりかねませんのでご注意ください。一応マスターキーが一本ありますが、大分古くなっておりますので、使えない可能性もあります」

と、そんなことを言っていた。

渡された鍵には、キーホルダーのような留め具でタグが付けられており、そこに03と手書きで書いてある。

おそらく、仕使さんが気を利かせて買ってきてくれたものだろう。使用人も大変だ。

自分の部屋に行き、荷物を片付ける。

しかし、生活に必要な最低限の物とトランプくらいしかもってきていないため、片付ける必要がないことに気づく。

……困りました。やることはありません。こんなときは……！

自分の部屋を出て、隣の隣、01号室の扉を開けた。

ノックもせずに。

「ジャジャーン！ 突撃、隣の持ち物チェック！ ……ア、レ？」
部屋の中には、ちょうど着替え途中の夢埜さんがいた。

スカートを脱ぎ、上着を脱ぎ、これから別の上着を着ようとしている。

そんな状況だった。

………。

「キヤアアアアアアア！」

物が投げつけられる。

痛い。

だが、読者サービスのためにもしつかりと見ようとする。

そう、読者のために僕は夢埜さんの下着姿をこの目に焼き付けなければならぬのだ。

そんな風に思ったとき、旅行かばんが投げられた。

投げられたかばんは、こんな山奥だと思っていなかったのか、なかなかの強度と重量を誇る、下にタイヤのついたアレだ。

それが僕の顔面にクリーンヒットした。

吹き飛び、廊下でゴミくずのように倒れる。

ボタン、と大きな音をたてて扉が閉まり、ご丁寧に鍵までかけられた。

……むむ、失敗してしまった上に、体のあちこちが痛い。

そんなことを思いながら伏していると、扉が開いた。

夢埜さんはかばんや物を回収すると、僕のことを完全に無視して扉を閉め、元のように鍵をかける。

いや、元のようにではない。

チェーンの音もしたので、チェーンロックまでしたのだろう。

まったく、ツンデレなのか。

ツンツンなのか。

どーせツンデレですけどね。

いろいろと反芻はんすうもとい反省をしながら廊下に倒れていると、

「あ、あのう、大丈夫、ですか……？」

声のする方を向くと、沙織ちゃんが心配そうな表情でこちらをのぞきこんでいた。

僕は体にバネが入っているかのように跳ね起き、

「大丈夫大丈夫。このくらい、何てことないよ」

すると、沙織ちゃんは安堵した様子で、

「よかった。突然悲鳴が上がって大きな音がしたので、何があったのかと思いました」

「いやー、夢埜さんの部屋に遊びに行ったら、ちょうど着替えてるところで。物を散々ぶつけられました。ノックもせずに開けた僕が悪いですけどね」

頭をかきながらそう答える。

すると沙織ちゃんは苦笑いして、

「それは散々でしたね。ところで、なぜ夢埜さんのところに？」
軽く首をかしげる。

「あんまり物を持ってこなかったせいで、片付けるような物がなくて。暇になったから他の人の部屋にお邪魔しようと思ったんですよ。01号室からこう、順に回っていいのかなと」

僕の答えに対し、控えめながらも喜びつつ、

「じゃあ、わたしも一緒にいいですか？ わたし、普段ここに

住んでいるので、片付ける物がそもそもないんです」

と、訊かれた。

「なるほど、では、04号室の四方八さんのところから回っていきますか」

言いながら僕が歩き出すと、沙織ちゃんは、はい、と返事をして隣を歩き始めた。

すると、前から四方八さんがこちらに駆けてくる。

あまりに慌てた様子なため、僕が、

「四方八さん、どうかしたんですか？」

と尋ねると、

「どうしたも、こうしたもないでしょう。さっき悲鳴と大きな物音がしましたけど、何があっただんですか？」

焦った口調で問い詰められる。

「ああ、それならですね、僕が夢埜さんの部屋に行ったら、扉を開けたときにちょうど着替え中だっただけです。悲鳴は夢埜さんのもの、大きな物音はかばんを投げつけられた音です」

「なんですって！ それは事件だ！ すぐに捜査をしなければ」

大げさなりアクションで、彼はそういった。

それを見て、沙織ちゃんが首をかしげながら、

「今のどこに事件性が……？」

と、四方八さんに訊く。

その言葉でここまでの事を振り返り、

「え？ えーと……ないですね、どこにも。すいません。勘違いしてしまっただけです」

恥ずかしそうに頭をかいて答える。

勘違い、で済まされるレベルの話なんだろうか。

僕にとっては甚だ疑問だったが、深く突っ込むべきでもないだろうと思ひ、自粛する。

「ところで、二人していったいどちらへ？」

さっきの恥ずかしさをごまかすようにいう。

「四方八さんのお部屋に遊びに。二人して暇なんですよ」

「私の部屋ですか？ 来ても何もありませんよ。暇つぶしになるような物すら持つてきていないんですから」

「そうですか……。では残念ですが、疑衣さんの部屋に行くことにします。四方八さんはどうしますか？」

「私は遠慮しておきます。部屋で夕飯までゆっくりしていますよ」
僕は、

「わかりました。ではまた」

と言つて四方八さんと別れ、疑衣さんの部屋へと向かった。

「ちゃらちゃちゃつちゃつちゃー！ ノックもせずドーン！」

そう言い、僕は扉を開けた。

疑衣さんはなにやら本を読んでいたようで、それを閉じながらこちらを向いて、

「やあ、よく来たね。もう充分に楽しんだらう？ さあ、ゆっくりしていつてくれ」

僕らの後ろを指差している。

それに対して笑顔で、

「ええ、ゆっくり楽しませてもらいます」

その答えに、彼は口の端を少し上げ、

「ほう、それはそれは。重畳重畳、善き哉善き哉。とんだ災難に逢つたものだね」

「ええ、まったくです。『遭つた』、ならまだよかつたんですが、そんな会話を繰り返した。すると、

「あの、二人とも何を言っているのですか？」

と、沙織ちゃんに訊かれる。

それに対し僕は、

「ふふふ、なに、ちょっとした愚考を口に出しているだけだよ」

しかし、疑衣さんは、

「うむ、この会話は非常に難度の高い妄言だな」

にやにやと笑みを湛えながらいう。

「疑衣さん、少し加減してください。沙織ちゃんがついてこれないですから」

「ふはは。申し訳ない。まさか返答されるとは思っていなかったの
でね」

「??? いったいどういうことですか?」

沙織ちゃんはさらに混乱してしまったようだ。

「ああ、解説してあげるよ。まず疑衣さんが、」

「『どんな来訪の仕方だ。そんな風に楽しむならば、さっさと帰っ
てくれ』そう皮肉を言ったのだよ」

「それに対して僕が、『ゆっくり楽しませてもらいます』と、皮肉
を利用してそう言ったんだ」

「だから、皮肉とわかっていいのか試すために、『それは最悪だ。
災難に逢うとはこのことだ』と、返した。このときの逢うは、人に
逢うとして使うものだ。つまり、『お前は災難のような奴だな』。

そう言ったわけだ」

「そんなことを言われた物ですから、『遭ったならよかったですね』
と皮肉で返したんですよ。こっちの『遭った』は事故とか災難とか
に使う方です。つまるところ、『本当に災難に遭えば良いのに』と
言ったんです」

「勿論、冗談のつもりだが、理解してくれないことがほとんどな。
冗談だとわかり、しかも内容に沿った返答までくれたものだから、
舞い上がってしまったのだ。すまないね、幽霊のご令嬢」

ここまでのすべての会話と同様に、まったく感情を見せずに、彼
はそういった。

これだから詐欺師は恐い。

無表情ではなく、無感情なのだ。

それはさておき、彼の部屋はまったくと言って何もなかった。

もともと部屋に備え付けてあるものを除けば、かばんのようなものすら見当たらない。

おそらく、これも詐欺師としてのスキルだろう。

「ところで、俺の部屋に来てもなにもないぞ。せいぜい俺がいるだけだ。俺すらいもないやも知れんがな」

「そうですね。時間つぶしのために回っているだけです。では、疑衣さんの会話も楽しんだことですし、そろそろお暇します」

「ふふ、時間つぶしの暇つぶしでありながら、お暇とはな」

「まあ、そんな感じですよ」

意味がありげで、意味のない言葉を交わし、疑衣さんの部屋を後にした。

彼との会話を思い出し、僕の愚考もここまでくるとたいした物ではないかと、錯覚を覚える。

所詮錯覚は錯覚だが、錯覚とは事実がどうであろうと認識としては別の事柄に見えることを言う。

つまり、事実を確認できない事柄というのは、錯覚ですら答えになりえる。

そう考えれば、悪い物でもないかもしれない。

だが、僕の愚考においては、それは逆の理を表す。

しかも、矛盾すら許容するのだから、たちが悪い。

……ああ、どうにかありませんかねえ。

そんな愚考すら生まれた。

愚考に愚考を重ね、愚考とはなんだろうと、そんな愚考すら始めると、いつの間にやら僕は、空岸さんの部屋の前にいた。

今までと同じように、ノックもせずドアを開けようとしたが、開かない。

どうやら鍵がかかっているようだ。

しかたがないので、さらに隣の、通間さんの部屋に向かった。

毎度のことだが、ノックなしで突然開ける。

「パラパーパーパーパッパー！ どうも、こんにちは　ぐはッ

！」

ドアが自分の方に戻って来て、顔面をしたたかにうちつけた。

……か、顔にダメージが多い日ですね。

「おうおう、ノックなしは礼儀がなってねえぜ。親しき仲にも礼儀あり。親しくねえならよけいだろっよ」

「す、すみません。失念していました」

「ま、良いってことよ。次からア気イつけるよ？」

にらまれる。

顔は笑っているが、目はマジだった。

次の部屋からはきちんとノックをしよう。

そう心に刻んだ。

すぐに磨耗してしまう気もするが。

部屋を見回すと、汚い。

どこから拾ってきたのかわからないが、雑多な物があちらこちらに転がっている。

どうやったら短時間で、ここまで汚くできるのだろうか。

訊いてみたい気もするが、本能が踏み入ってはいけないと警告したので、踏みとどまる。

「で、部屋ん中キヨロキヨロ見てなんだってえんだ。なんか用か？」

「いえ、用というほどの物では」

「ハン。ならとつととけエれ。オレア忙しいんだ。しっしっ」

追い出されてしまった。

こうなつた以上再び入る訳にもいかず、北棟に行くことにする。

「ちよつとだけ怖い人でしたね」

沙織ちゃんがそんなことをボソリとつぶやいた。

「そうだね。僕なんて怒られちゃったしね」

苦笑しながらそう返すと、彼女は、

「……十一月二十九日さんは恐くなくてよかったです」

どこかにはかんだような、そんな表情で言った。

「わからないよ。僕だって怖いときはあるんだから」

「どんなときですか？」

「今だよー。ガオー」

おどけてそう言う。

「キヤー」

意外にもノリが良い。

悪ノリして思い切り抱きついた。

「キヤー！　そ、それはやりすぎです！　は、離してくださいー！
怒られた。

本日二度目。

ちなみに言えば、悲鳴を上げさせたのも二度目。

なかなかハツチャけていた。

反省しつつ、謝罪。

許してくれたので、反省を生かしてノックをする。

一つ目の反省と二つ目の反省は内容が違う？

細かいことは気にしない。

兎にも角にも、本日初のノックなのだ。

中からネネちゃんの声が聞こえ、扉が開いた。

「はい、どうしたんですか？」

「ちよつと遊びに来たよ」

「わたしも、一緒です」

「うん？　なにも面白い物はありませんですよ？」

そんなことを言うが、

「魔女見習いなんですから、そんなことはないでしょう。と言って
みたりして。実際、あってもなくてもいいんですよ。それに関して
はそれほど期待していませんから。僕が期待しているのは女子高生
の部屋、という一点のみです」

「最後の一言が余計です。一気に入れたくなくなりましたです」

「そんなこと言わないで。お、お願い。少しだけ、駄目ですか？」

沙織ちゃんが小動物オーラ全開で訊く。

「う……。わかりました。沙織ちゃんに免じて入れてあげます」

「わーい、やったー」

僕が嬉々として入っていき、

「ありがとう、ネネちゃん」

沙織ちゃんはお礼というのも少し変だが、一言告げて、入った。

部屋の中には妖しげな雰囲気、漂う不気味な物がいっぱい。ではなく、普通の部屋だった。

大きな旅行かばんがひとつおいてあり、それ以外に目立ったものは特にない。

ただし、かばんの中身は、よくわからない物でゴった返していた。妖しげな、とまではいかないが、謎の文字で書かれた本や、不思議な意匠のペンなどが出てきた。

曰く、すべて魔法に関するものなんだとか。

僕はおつとおどろおどろしいイメージを持っていたため、裏切られたというか、肩透かしをくらったというか、なにか残念な感じであつた。

旅行かばんとはいえ、所詮はかばんひとつだ。

あつという間に、珍しく、めばしい物の物色が終わってしまう。

「もうこれと言って面白い物はありませんですよ」

「そうですね。夕飯の時間までそう長くもありませんし、次の部屋に行くとします。では」

そついい、次は優希さんの部屋へと移動した。

しかし、

「ここも留守ですか。仕方ありませんね、優里さんの部屋に向かいましょう」

隣の部屋に行く。

ノックをすると、優里さんが、どうぞ、といったため、ドアを開ける。

部屋の中には、美術室のような匂いが漂っていた。

「あら、十一月二十九日くんじゃない。どうかしたの？」

優希さんもこの部屋にいたらしい。

「ど、どうしたんです?」

優里さんにそう尋ねられる。

今日、何度目になるかわからない説明をすると、部屋に上がせてもらえることになった。

部屋には持ち込まれた画材道具が置かれており、かばんなどはそれほど目を引かない。

窓の近くには、描いている途中と思わしき絵があった。

「へえ、こんな風なんだ」

そう言いながら僕が絵に触れようとすると、

「触らないでツー!」

優里さんの大声が響いた。

振り向くと、みな、驚愕をあらわにしている。

「あ、そ、その、ごめんなさい。そ、そのう、それ、まだ途中だから、さ、触らないで。お、お願い」

「僕の方こそごめんなさい。勝手に触っていいものじゃないですよね」

お互いに謝りあい、どこかぎこちない空気が漂うが、遊び始めるとそんな空気は霧散していった。

かばんの中の物を物色し始めると、沙織ちゃんが、

「あれ? この少し古い服はなんですか? 他のはみんな新しいのに、この二着だけ着古してる感じがします」

確かに、他のものに比べて色が落ちている。

「そ、それは、絵の具を使うとき、汚れてもいいように着る服なのになるほど、ではこれは?」

と、今度は僕がパンを指して言う。

「それは、デッサンのときに、消しゴムみたいに使うの」

「じゃあじゃあ、このハンマーは?」

ネネちゃんに順番が行き、問う。

「わ、私、彫刻も、少しやっているから、それで……」
なかなか変わった物が多い。

あらかた物色したが、夕飯の時間までは少し時間があつた。だからと言って薬師さんの部屋を物色するほどの時間はない。なにか案はないかと考えていると、

「眉間にしわをよせてどうしましたか？」

尋ねてきたのは優希さんだ。

少しだけあいてしまった時間をどうしようか考えていることを伝えると、

「トランプかなにかありませんか？ これくらいの時間でしたら、そのあたりが手ごろかと思えます」

「おお、そうですね！ そういえば持ってきているのを忘れていました。ちょっと取ってくるので、ロビーに行っていてください」
そういつて一度別れることにした。

トランプをもってロビーに行くと、優里さんはおらず、代わりに言っではなんだが、空岸さんがいた。

「おや、優里さんは？」

そう僕が尋ねると優希さんが、

「あの子は絵を描くために、少し外を見てくるそうよ」
なるほど、それでいないのか。

僕は空岸さんの方を向き、

「空岸さんはどうしてこちらへ？」

「どうしたもこうしたも、暇になった上、もうすぐ夕食の時間だ。多少早めに来て、のんびりと待っていても別段問題ないだろう？」

「そうですね。では、夕食までの間、トランプでもやりませんか？」
「いや、遠慮しておこう。あまりトランプだとかそういう運の関係するゲームは好きでなくな」

「そうですね。では残念ですが、優希さん、沙織ちゃんとやっていることにします」

そういつて僕はトランプを箱から出し、軽くきりながら二人のところへ向かう。

そんなときだ。

その悲鳴が聞こえてきたのは。

女性の、甲高く劈つんざくような絶叫。

「なんですか!?!」

僕がそっくり、

「今の……! 優里の悲鳴よ!」

優希さんがそう答えた。

「裏の方から聞こえたな。さっさと行くぞ」

空岸さんがそっくり言い、僕らは急いで裏へと向かった。

裏口から外に出ると、西棟の影に優里さんの姿があった。

優里さんは腕を押さえており、手の間からは血が漏れている。

「優里!」

優希さんが駆け寄り寄ろうとしたが、それを制し、

「大丈夫ですか?!」

僕がそう言いながら近づくと、優里さんは、南を指さした。

そこにあるものに気づき、僕は、

「空岸さん、皆さんをロビーに」

「まさか……やっぱりあれだな。馴染み深い空気だと思ったよ。わ

かった。こっちは俺に任せろ。そいつはどうするんだ?」

「優里さん、立てますか?」

彼女は首を縦に振る。

「では空岸さん、彼女もお願いします」

「いいだろう。これは貸しといてやるよ」

「殺人鬼相手に借りを作ってしまうとは……なにを要求されるか、想像するだに恐ろしいですね」

僕がこんな状況にありながら、苦笑しながら言つと、

「ハッ! こんな状況でそんな冗談を吐けるような奴に言われたかねえよ」

そう返された。

空岸さんが他の方々をつれ、立ち去ったところで、南側から複数
の足音が聞こえて来た。

南側に行くため、目の前のそれを跨ぐ。

向こうに行くに僕は、

「止まってください」

そう言った。

周ってきていたのは、仕使さん、薬師さん、疑衣さん、ネネちゃん、夢埜さん、四方八さんの六人だ。

「薬師さん、四方八さんは残って、他の方はロビーに向かっていた
だけですか？」

「……かしこまりまりました。では皆様、ロビーに参りましょうか」
僕の指定した人から何かを予測したのか、彼はそういつて皆さん
を引き連れ、玄関へと引き返す。

僕が残った二人の方を向くと、

「なにがあつたんですか、十一月二十九日さん？ 向こうでは吊橋
が落ちていましたよ!？」

「私と、四方八さんが残った、ということ、推測は立つがね」

肩をすくめて薬師さんが言った。

「百聞は一見に如かず、です。こっちへ」

僕がそう言つて彼らを、それが倒れているところに案内する。

そこで僕がそれ、と呼んだ人の成れの果ては、胸から血を零して
いた。

地面をその身の血で汚し、自分で作った血の池の上に、倒れてい
た。

地に伏しているのか。

血に伏しているのか。

池に伏しているのか。

まるで、それを問うためだけに、外で殺したかのようでもある

だが、僕の愚考では、答えの出ない問題だ。

いや、それ以前に、問題ですらない。

今、僕の愚考にとって問題なのは、通間 道征さんが、死んでい
ることだった。

問2 フーダニット・ハウダニット・ワイダニット

現場の検証というか、死体の確認が終わると、薬師さんは優里さんの手当てのためにロビーへ。

僕と四方八さんは警察に連絡するため管理室へと向かった。

この山中では携帯も圏外になってしまったため、唯一つながるのは管理室に置いてある電話だけだ。

しかし、警察に連絡することは、できなかった。

なぜなら、電話線を切断されていたからだ。

仕方なくマスターキーを回収し、切り落とされた吊橋へと向かった。

吊橋は向こう側に落ちている。

「十一月二十九日さん、これを見てください。血です」

言いながら四方八さんは、切り落とされたロープを、こちらへ手渡す。

見ると、切り口には少量ではあるが、血が付着していた。

「おそらく、電話線についていたものと同じでしょう。犯行の後、犯人は吊橋を落とし、警察への連絡が遅れるよう電話線を切断したってところですかね」

四方八さんは『探偵』として、そう言った。

その後、僕らは現場の状況が後からでもわかるよう、写真を撮り、通間さんの死体を中へと搬入した。

電話線が切断されており、吊橋が落とされている以上、しばらくの間この館にいないなければならないということだ。

そんな現状をロビーにいる人、つまりはこの館にいる全員に、僕らは伝えた。

そして、僕は口を開き、

「このロビーに、籠城してはどうでしょう？」

そう、提案した。

「犯人はだれだか、今どこにいるのか、全くわかりません。でするので、全員で固まっていれば、安全だと思うのですが？」

「良い提案だな」

疑衣さんが言った。

「もし仮に、 仮にだが、死体の第一発見者である友紙 優里、あるいはアリバイの無い俺、夢埜 愛、四方八 方、大真賀 ネネ、薬師 医病、仕使 十六助が犯人であったとしても、全員で固まっていれば危険も少ない。おっと、忘れていたが謎の侵入者である可能性も捨てきれない。まあ、こんな山奥に来るような者がいるとは、とてもじゃないが思えないがね」

得意そうに言うと、夢埜さんが、

「ちよつと、どういうつもり!? 私はやってないわよ! わざわざこんなところまで来たのに、なんでそんなこと言われなきゃいけないわけ!？」

「落ち着きなさいよ。……疑衣さん、優里が入っているのはどういうわけ? 確かに優里は第一発見者だけど、犯人に襲われているのよ?」

優希さんが問い詰める。

「なに、第一発見者だから入れただけさ。それに、腕の傷は犯人じやなくて被害者に付けられたものかも知れん。結局、犯人に襲われたと言っているのは本人だけなんだ。容疑者に入れておいてもよからう?」

さも当然のように、人を、殺人の容疑者として扱う。

しかし、言葉としては正論を言う。

その様子に、洪々とした様子で優希さんは、優里さんの容疑を受諾した。

すると今度は、薬師さんが、

「……籠城、か。確かにある程度の安全性が保たれるのは間違いない。だが、君たちの中の複数が共犯であるかも知れないこともまた間違いないのだ。そんな中で安心して眠れ、と? とてもではない

が私には不可能だ。そうするくらいなら、自分の部屋に立て籠もっているほうがまだ良い」

「では、薬師さんは……」

僕が言おうとすると、それを遮り、

「ああ。私は自分の部屋に立て籠もる。食事時だけは呼んでくれるとありがたいが」

「わかりました」

僕はそう言い、

「他に単独で行動したい方はいますか？」

全員に聞こえるよう尋ねた。

他に単独行動を望む人はいないようだ。

こうして、僕らの籠城は、始まった。

籠城を始めてしばらくは、暗惨とした空気が漂い、まるで通間さんのお通夜か葬儀をしているようであった。

実際、その面は少なからずあるのだろう。

夕食の間、その空気は維持され続け、夜の九時を回った。

お風呂にも入り、空白の時間ができる。

だから、

「こんな風にいつまでも暗いのもなんですし、気晴らしにトランプでもやりませんか？」

そう言った。

何人かにはジト目、あるいは睨み付けられたりもしたが、

「良いですね！ ネネもこういうのは苦手なので、もっとパーティーとしてるほうが良いです！」

「わたしもやりたいです。さっきはできなかつたですし、その……」
後半ごによごによと聞き取れなかつたが、賛同はしてくれた。

ちなみに、男性陣は仕使さん、四方八さんが気を使ってくれたのか、一緒にやつてくれるようだ。

地方ルールなどの多い大貧民（大富豪ともいう）は避け、ババ抜

きをする。

ディーラーは、言いだしっぺの僕が行うことになった。カードをよく切り、配る。

自分の手札を見ると、ジョーカーがあった。ぐるぐると、席順で決めた順番でカードを引き合う。

結局、誰もジョーカーを引いてくれず負け。

その後も、ババ抜きを続け、僕の戦績は一位一回、二位三回、三位二回、四位一回だった。

さすがに七回もババ抜きをしていると夜も更け、日付を跨ぐ直前になる。

すると、優里さんが立ち上がり、薬師さんに話しかけた。

部屋が静かなため、耳に入ってくる言葉の断片から察するに、包帯を換えて欲しいようだ。

薬師さんが僕に、

「少々、部屋を出るよ。もしかしたら私は帰ってこないかもしれないが、部屋に帰ったと考えてくれ。一応、その際には優里くんと言伝を頼むつもりだが、一応な」

「わかりました。おやすみなさい」

二人が部屋を後にする。

さて、仕切りなおして八回目になるババ抜きを始めようとすると、館全体を震わすような、大音響が鳴り響いた。

ゴーン、ゴーンという鈍く、重厚な調べは、鐘の音だ。

どうやらこの館の時計は近所迷惑なほどの音量で鳴るらしい。

長い残響をし、音が消えた。

「すごい音だったですね。ネネこんなの初めて聞きましたですよ。目をまん丸にして言う。

それに対し、優希さんが、

「これ、お昼も鳴ってたのよ。仕使さんに訊いたら、夜も鳴るって言われたから知っていたけど、それでも心臓に悪いわね」

「確かに。今、鐘のことを知りましたが、明日のお昼には同じよ

うに驚いていそうですね」

八回目のババ抜きが終わるころには、優里さんは帰っていた。

ババ抜きは十回目まで続き、キリがいいということで、そこで終わることにした。

時計を見ると、午前一時を回っている。

誰か一人が必ず起きるようにローテーションを組み、一人、また一人と眠りにつく。

問3 フーダニット・ハウダニット・ワイダニット

「起きてください！ 十一月二十九日さん！」

肩を大きくゆすられ、目を開ける。

「どうしたんですか、四方八さん。こんなに朝早くから慌てて」

あくびを噛み殺しながら僕が訊くと、

「薬師さんが部屋で殺されているんです！」

驚きのあまり僕は声が出ない。

まず、落ち着くべきだと感じ、時間を確認する。

午前4：55。

まだ空岸さんが担当の時間だが、5：00からは四方八さんの担当時間になる。

おそらく、四方八さんが早めに起きたのだろう。

見れば、仕使さんも起床している。

「仕使さんにここをお任せし、空岸さんと二人で一度見回りをすることにしたんです。早朝ですから、犯人が油断して寝ている可能性も高いですからね。そして見回ってみると、薬師さんの部屋の扉が大きく開け放たれていたんです。おかしいな、と思ったので覗いてみると、頭に深々とナイフが突き立てられている、薬師さんの遺体があったんです！」

逡巡し、

「僕にも現場を見せてもらっていいですか？」

そう言い、現場へと向かった。

現場に着くと、文字通り『頭にナイフを突き立てられた死体』があった。

ナイフは根元まで突き刺されており、間違いなく頭蓋骨を貫通している。

そして、体中を太いロープでぐるぐる巻きにし、ベッドに無理や

り結び付けてある。

足元に立ちその姿を見ると、ナイフのに施された細やかな意匠も関係してか、一種の妖しさ、美しさすら感じる。

しかし僕は、

「これは……ありえない……」

僕がつぶやくと、

「なにがありえないんですか？」

「頭蓋骨は、非常に硬いんです。それはもう、本当に。とてもじゃありませんが、人間の力だけでナイフを突き刺す、ましてや貫通させる、なんてことは不可能なんです。もちろん何かしらの道具を用いれば不可能ではないですが、そういった道具を用いるということ、強い力を扱う、という意味なんです」

「つまり……」

四方八さんがつぶやく。

「ええ、四方八さんの思っているとおりです。強い力を使う際には、必ず大きな音が発生するはずなんです。ですが、昨夜から今朝にかけて、そんな大きな音はしていませんよ」

僕は現場の状況をできる限り残すため、第一の殺人のときを同じく、カメラで写真を撮った。

薬師さんの遺体からロープを外すと、体のあちこちに跡が残っている。

特に色濃く残っていたのは、おなかの上を通る一本、指に絡まった数本、首の円周を走る一本、太ももに何回も巻きつけていた一本だった。

通間さんの遺体と同じく、薬師さんの遺体を管理人室に安置する。

きちんと鍵をかけロビーへ戻ると、すでに全員が起きていた。

そして、

「ねえ、優里はどこ!?!」

優希さんが今にも襲い掛かろうとするような形相で、詰問してきた。

た。

「優里さんですか？ いない……？ まさか！ まずは部屋を見に行きましょう！」

全員でそろって11号室に行く。

扉は……開いていない。

「一応中にいないか確認しましょう。 優里さん、いらっしやいますかー！」

ドンドンと粗暴なノックを何度もする。

しかし、返事が無い。

「 四方八さん、マスターキーを使って開けてください。優希さんもいいですね？」

二人がコクリとうなずく。

四方八さんが胸の内ポケットからマスターキーを取り出し、鍵を回す。

錠の開く音がし、ノブに手をかける。

一気に扉を開き、中を見る。

そこには

「きゃあああああああああああ！」

体のど真ん中をナイフで刺され、部屋に張り巡らせたロープに引っ掛け、吊るされた優里さんの死体が、あった。

そして、優里さんの死体に突き刺さったナイフには、11と書かれたタグのついた鍵が、吊るしてあった。

余白

「なかなか面白い事件だね。友紙 優里が殺されたなら、この事件、殺人は、ここでおしまいかな？ …… そうみたいだね。」

簡単にここまでの犯行をまとめてみよう。

はじめが通りの魔的な殺人。被害者は通間 道征。橋を落とすことは、誰にもできないという不可能犯罪。

次は深夜に行われた殺人。被害者は薬師 医病。無音が貫通のどちらかが無理になるという不可能犯罪。

最後は同じく深夜の殺人。被害者は友紙 優里。完全無欠にありきたりな、密室殺人という不可能犯罪。

すべてがすべて、不可能なんだね」

《命名師》が言う。

「さて、この後は解決編に入るわけだ。《トラブルメイカー自問自答》の名前を洒落て言うなら、『解答欄』と言ったところかな？ …… ふむ、その前に少しだけ整理の話を入れるのかい。なら、…… そうだね、」

余白』と名付けるべきかな？ さあ、語っておくれ？」

さて、一度ここで物語を整理しよう。

問一。配点：33点。

通間 道征の殺人。

現場は洋館の外。事件発生時には友紙 優里がともにいた。事件発覚は友紙 優里の悲鳴による。

同時期、電話線と吊り橋の切断が行われる。どちらにも血が付着

していることから、事件に使用した刃物によって行われたと見られる。

しかし、事件発覚時には全員が現場へと急行しており、犯人の姿は誰も見ていないことから不可能犯罪である。

犯人は友紙 優里を切りつけているため、存在するのは間違いない。

問二。配点：33点。

薬師 医病の殺人。

現場は被害者の部屋。事件発生時間は、被害者が部屋に帰った時から発見されるまでの深夜間。

頭にナイフが突きたち、体中をロープで縛られている状況で発見された。

頭蓋骨の硬さを鑑みるに、ナイフを何かの道具で突き刺したものと見られる。

しかし、深夜の間には見張り役が常に誰か起きており、道具を使ったような、物音はしなかった。

これにより、不可能な犯罪であると言える。

なお、大真賀 ネネは頭をナイフで貫くような魔法を使えない。

(本人談)

そもそも、彼女は深夜に部屋を出ていない。

問三。配点：33点。

友紙 優里の殺人。

現場は被害者の部屋。事件発生は、深夜の間。胸にナイフが刺さっているだけで、他に外傷は見られない。

被害者は見張り役時にロビーから抜け出し、殺害されたものと見られる。

発見時、被害者の部屋には鍵がかかっており、マスターキーで開錠することによって死体を発見した。

また、11番と書かれたタグのついた鍵が、部屋の中から発見された。

しかし、見張り役は常に二人おり、全員、マスターキーを持ち出していないことがわかっている。

これにより、いわゆる密室殺人が構成され、不可能犯罪となる。

なお、大真賀 ネネは施錠の魔法を使用できない。(本人談)

そもそも、彼女は深夜にロビーを一度も出ていない。

また、宮小路 沙織も、同じく外に出ていない。

特別問題。配点：1点。

これは、《トラブルメイカー自問自答》と呼ばれる僕から、君たちへの問題。

僕の正体を当ててください。

僕は誰で、なぜ自問自答、トラブルメイカーなどと呼ばれるのか。

僕の目的は何か。

それを当ててください。

なお、この問題は非常にアンフェアかつ卑怯で、ヒントなどと呼べるものはほとんど存在しない。

よって、この問題の配点は難易度に釣り合わない1点とする。

解答欄は次ページ。

すでに僕が埋めていますので、解答です。

では、ごっぞ。

解答欄

「すいません、わざわざ集まっていたありがとうございます」
僕は、全員をロビーに集め、言った。

「なんで私たち全員を集めたわけ？ もしかして、犯人がわかったから、推理小説やミステリよろしく推理ショーでもやるってわけ？」

無然な、イライラとした口調で夢埜さんが言う。

僕は、

「ええ、そのとおりです」

簡潔に、そう答えた。

「どうやってやったって言うんですか！？ 確かに他殺が間違いな以上犯人はいますが、すべて『ヒト』には不可能だったじゃありませんか！」

四方八さんが目を見張らせて問うのに対し、

「そう焦らないください。今からそれを説明しますから」

すると、四方八さんが、

「推理小説の手法で申し訳ないのですが、優里さんの事件はありきたりな方法で密室でなくなるのではないですか？」

「そうですね……よくある方法としては、実は窓が開いていたとか、扉の影に隠れていたとか、外側から鍵を操作する方法があったとかですかね？」

それらに関しては不可能です。

これだけの人数がいる中で、窓が開いていることに気づかないわけがありません。外側から鍵を操作する方法は、ないこともないですが、まず間違いなく何かしらの痕跡が残るものです。

これらの理由から、推理小説的手法は通用しません。

では、どのようにやったのか？

実は、非常に単純明快で、僕らは目くらましをされただけなので

す。陳腐かつ馬鹿らしい手法。ありきたりな推理小説的手法にすら、とてもではありませんが及ぶ物ではないのです」

「い、いったいどんなことを？」

そんなことを仕使さんが言う。

僕は一息入れ、

「犯人は外に出て、キッチンと部屋の鍵で鍵をかけたただだったので。」

つまり、鍵のタグだけを交換しておき、あたかも部屋の中の鍵が本物の鍵であるかのように、目立つよう引っ掛けておいただけなのです。

馬鹿にするのもほどがある、下らないトリックです。ですが、ここまですべての事件が不可能な犯罪であるため、勝手に『不可能犯罪』だと思いこんでしまったのです」

「ふはは、ペテン師がペテンにはまるとはな。まったく、いただけないな」

疑衣さんは自嘲する。が、彼のその表情からは何も見えない。

「続けます。」

第一の事件。これは、電話線と吊り橋の切断後の、犯人の消失が問題でした。

ですが、考えてみてください。電話線と吊り橋を切断するのは、どうなのでしょう？

……そう、無理なのです」

僕がそう言うと、

「無理？ なら不可能犯罪だと認めるのか？」

空岸さんの言葉に、

「いいえ。僕が言ったのは、殺害後に切断するのが無理だと言ったのです。」

すなわち、電話線と吊り橋を切断してから、殺害したのです。

これなら、不可能ではありません。血は、自分のものでもなんでも、替えがきくでしょう

このまま続けて、第二の事件です。

これの問題は、頭蓋骨の貫通作業と、静音性の両立が不可能な点につきます。

しかし、深夜の間、唯一静かでもなくてもいい時間があることを、僕らは知っています。ほら、これです！」

そのとき、重厚な音が、館全体を震わせた。

それは、鐘の音。

12時に鳴る、大音量だ。

「さて、もうお気づきでしょう。犯人は、この音に乗じて、ハンマーを叩きつけたのです。そして、これができるのは、ただ一人」
一息。

「犯人は、友紙 優里さん。そう名乗ったあなた、友紙 優希さん、あなたです」

僕が言うと、

「ちよつと待って！ 私が犯人だって言うの!？」

優希さんは激昂し、憤怒の形相でこちらをにらむ。

「ええ。まさに推理小説的手法です。『双子の入れ替わり』。これをおこなったのですね」

「確かに、初対面なら入れ替わっても気づかないかもしれないわ。でも、実生活で入れ替わりはばれてしまうわよ？ それでは、犯行をしましたと言っているような物じゃない？」

優希さんが反論する。

対し、僕は、

「あなたたちは、ここに来る時点で既に入れ替わっていたのです。

僕らの知る優里さんこそが優希さんであり、僕らの知っている優希さんこそが優里さんなのです。」

つまり、優希さんは優里さんとしてこの館を訪れ、第一、第二の殺人を起こす。そして、第三の殺人で優希さんと名乗っていた優里さんを殺害し、元のように優希さんとしてここにいるわけです」

一度、言葉を切り、

「あなたは、友紙 優里としてここを訪れ、殺人を犯していきます。まず、第一の事件では、自分の二の腕を切り、血のついたナイフで電話線と吊り橋のロープを切断します。

そして、予め呼び出しておいた通間さんを襲い、殺害。悲鳴をあげて、人を呼ぶことで、不可能犯罪を作り上げました。

次の事件では、『包帯を替えて欲しい』と言って薬師さんと二人になり、彼の動きを止めます。首の周りに濃い痣があったので、おそらく絞殺したのでしょう。

しかし、それだけでは不可能犯罪になりません。ですので、部屋からナイフとハンマーを持ち出し、鐘の音にあわせてナイフを突き立てます。

そして、あなたは何食わぬ顔でロビーへと戻りました。

その夜。

あなたは優希さん……実際には優里さんに、見張りが終わる頃に、部屋へ行くように言っておきます。

優希さんの代わりに見張りになるのは、優里さん、あなたです。

あなたは彼女の部屋まで行き、あっさりと殺害。

鍵のタグを付け替え、彼女の遺体を飾り付けました。

これが、この事件の全貌です」

そこまで言うと、優希さんはふう、と溜息をつき、

「……定型文に従わせてもらうけど、証拠はあるのかしら？」
どこか観念したような様子で言った。

「そうですね……凶器なんかは、きつと産の下でしょうし。で

すが、あります。あなたの腕を見せてください。腕に傷があるのは、優里さんであって、優希さん、あなたではないはずだ。それでも腕に傷があれば、それは入れ替わっていた証拠です。入れ替わりさえ立証できれば、あとはあなた以外に不可能な犯行ですからね」

お手上げ、と言つように肩をすくめ、

「あーあ、どうしてもしてはれちゃったのかしらね。それで、動機でもしやべればいいの？」

「いえ、最後まで僕がしゃべりましょう。あなたは間違っているところを指摘してくださいれば結構です。あなたの動機、それは『芸術』ですね？」

すると沙織ちゃんが驚き、

「そ、そんな理由で!?!」

「そんな理由とは失礼ね。私にとっては大問題よ。それこそ、人を殺すくらいには」

沙織ちゃんをにらみつけて、優希さんは言った。

僕がそれに続けて、

「優希さんは、芸術家としても動いていたのですね。そうでなければ、僕が未完成の作品を触りそうになったとき、あんな声を出すことはできません。そして、あなたの考える最高の芸術とは、人間のオブジェ、死体での表現なんですね。だからこそ、殺す場所、殺し方、殺す時間にこだわり、不可能にもこだわった。違いますか？」

「大・正・解。題名はそれぞれ、『<チ>に伏す者』、『死体に絡む呪縛』、『否定された女神』。どれも傑作のはずだったのにな。」

……犯行がバレては贗作以下の価値しかないわ」

言いながら首を振る。

そして彼女はおもむろにポケットに手をつ込み、言った。

「タイトル 題名、『笑う変人』」

彼女はポケットから取り出したナイフで、自分の首を切り裂く。

彼女の首からは大量の血が吹き、その死に顔は、狂笑に満ちていた。

見直しをしましょう

彼女と、彼女が殺した人々の遺体は、事件初日から数えて三日目の昼に、警察に引き渡された。

僕らがいつになっても帰って来ないため、心配した友人、家族らが連絡したらしい。

全員が一度警察署に連れて行かれることになり、その場で別れることとなった。

もう既に大半の人は館を去り、残すところは僕と、夢埜さんの二人だけだ。

隣に立った彼女が、思い出したかのように口を開いた。

「……あなた、最悪ね」

一瞬の沈黙。

「なぜ、そう思っていますか……？」

「言うまでもないでしょう？ 彼女の目的は、『芸術』のただ一点のみ。だったら、自分すら作品へと変える、あの結果が待っていることくらい、簡単に予測がつくはずよ。なのに、あなたはあえてそれをしなかった。それはそうよね？ だって、それをするためにわざわざこんな手の込んだことをしたんだもの」

飽きたように、呆れたように、諦めたように、彼女は言葉を紡ぐ。

「 たまたま奇人や変人が集まり、たまたまそこで殺人が起きたそんなこと、普通はありえないわ。じゃあ、この状況を作り出した人がいるのよ。そう、この館に殺人を起こしかねず、殺害されかねない人を集めたのはあなたでしょう？」

「なぜ、僕がそんなことを？」

笑みを浮かべたまま、僕は夢埜さんに問う。

「だからさつきも言ったじゃない。あなたは、殺人犯を自殺に追い込むため、もつと言えば、

『殺人犯を合法的に殺すため』に、

こんな舞台を用意したのでしょう？ 残念ながら証拠はないけれど、私は絶対にあなたのことを信用しないし、嫌悪するわ。それが、あなたに対する私からのささやかな報復。どう、辛いかしら？」

澄ました表情で、冷やかな蔑視をこちらへと向ける。

僕はゆっくりと口を開いて、

「すごく、辛いです。辛いはずのことを、辛いと感じられないことが、本当に、辛いよ」

「そう。じゃあ、それが私から与えることのできる、唯一の罰。一生、背負いなさい」

彼女は厳しく言い切り、足を踏み出した。

そして、館を立ち去り、残った僕も、少ししてから、立ち去った。

「ほう。そんな話だったのか。いやはや、これで僕を含めて二人目になるね、キミの本質を言い当てたのは。トランプメイカー《自問自答》にしては、珍しいものだね。そういえば、彼女は偶像だアイドルそうじゃないか。おそらく、空気というか、雰囲気というか、そういうものに敏感なんだろう。どう考えても、アンバランスな館だったからね。……もし、彼女のことを名づけるとすれば、真実を穿つ寒冷な槍、アイズレック《氷の視線》とでもするのかな？」

僕にそんなことを言われても困る。

なんといつても、《命名師》なのはキミなのだから。

「おやおや、そんなそっけない態度をしてほしくはないな。僕だって意見がほしいのさ。人という動物は、他者からの評価を得ないと安心できない、臆病で脆弱な生物なのだからね。ところで、今回の

事件はキミの愚考の足しになったのかな？」

それなりにはね。

ただ、最後の彼女の言葉が痛くてね。

しばらくはやめるかも知れない。

「おやおやおやおや！ 珍妙なことを言うね！ まったく、この事件は非常に面白い。いつものようにキミが問題を作り、キミが完膚無きまでに答え、いつもとは違って彼女がそれを引き裂いた。こんな事件はめったに無い。ぜひ記念に名前をつけたいのだが、いい案は無いかい？」

そうだな……。

僕は少しだけ思考を動かし、すぐ言葉を発した。

「タイトル題名、『キジン×ヘンジン×サツジン』ってところじゃないか？」

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2520/>

キジン×ヘンジン×サツジン

2010年10月8日14時43分発行